

思春期登校拒否児の治療過程

——母親面接を通して——

田畑 洋子

A Study on the Healing Process of a School Refusal Girl at Puberty Through the Counseling of Her Mother

Hiroko TABATA

はじめに

近年、登校拒否が増加し、学校や各相談機関で対処に追われているのは、今更いうまでもないことである。当大学の心理教育相談室に於ても登校拒否の主訴が最も多い。母子で来室する場合には、母親にはカウンセリング、子どもには遊戯治療という併行面接の形態がとられるが、中高生になると、本人が姿を現わさないことも多い。学校に行くのを拒否するのみならず、かれらが“学校の臭いがする”と感じる相談室をも拒否するのである。そのため、対処方法には苦慮するのであるが、かれらのこの“内閉”¹⁾を保証することが成長のためにはどうしても必要であることを考えると、来室を促すより、母親の面接を通してかれらに働きかけ、母親の成長を通してかれらの成長をも促す方法が考えられねばならない。ここに提示するのは、高校2年生の女子生徒が登校拒否を起し、母親のカウンセリングを通して、解決に至った事例である。母親の面接経過を分析し、子どもの変化と母親の成長を跡づけることを目的とする。

事例の概要

- 1) 主訴；長女（高2）の登校拒否のことで相談したい。
- 2) 家族構成；夫—45歳，サラリーマン．妻（クライアント）—40歳，主婦。
長女—高校2年生．次女—中学1年生（年齢は受付時）
- 3) 登校拒否発症までの経過；小学校4年生頃から週1回のペースで休むようになる。体育の時間に休みがちになり、身体がひ弱な感じになってきたので、母親が自然食品のグループに入り食生活の改善を考えた所、健康的になった。小学校6年生になり“学校いや！”といい出したので、地元の中学校は無理だと思い、私立の中学校に進学した。中学校時代と高校1年生までは、風邪で休む程度で楽しくしていた様子である。高校2年生になり、班長の役が勝手にきめられた事が負担になり、5月11日から欠席し出した。
- 4) 現在の状態；学校のことは触れられない。昼頃起床し、昼食を母親の分と2人分作る。手紙を書いたり、テレビを見たり、雑誌を読んだり、母親と買物に行ったりして過している。
- 5) 来談経路；高校の生活指導の先生に紹介される。
- 6) 面接の形態；週1回、毎回1時間の面接をインテーク（6月15日）から第40回（翌年9月12日）まで、更に翌年の第51回（3月15日）までは隔週の面接を続ける。子どもの来室は1

回のみである。

面接の経過

第Ⅰ期 インテーク（6月15日）～第4回（7月23日） 導入——問題の提示——

インテーク時、母親だけが来室する。タンクトップ、ジャケット、スカートと白づくめの装いに、さわやかなというよりは、“色がないな”という印象をうける。家族構成、家族の性格、相談内容、過去の育て方、問題点をレポート用紙5枚に書き持参する。はきはきした話し方であるが、大変な状況なのに明るすぎるのが少しおかしいとカウンセラー（以下 Co と記す）は感じた。経過が話され、学校に行かなくなって半月位は、部屋に閉じこもったり、物をぶつけたりどうしようもない状態だったことが分る。親としては自殺の危険も感じ、夫が“重症だし、休学願を出した方がいいんじゃないか”といったことに従うが、最後までこの決定はよかったのかという迷いをクライアント（以下 Cl と記す）の心に残す。結婚の最初からこだわりがあり、夫婦関係がうまくいっていないこと、Cl の母親が毎日電話をかけてきて、ペースにまきこまれていた事が話され、親自身の問題があることが示唆される。Cl も“お母さん自身のために行ってくる”と子ども（以下 Ch と記す）にいて来室しており、ある程度問題の理解は出来ていたようである。

Co は Ch への対応と同時に親の問題に取り組む積りで母親面接を続けることに方針を決め、Cl には、Ch のぐちを聴くこと、触れ合いの機会を作ること、一年間かかって進路をきめることを助言する。

Ch は一カ月の間に少しずつ安定し、人形の絵の変化を母親が報告する。眼が白いままで気持悪い顔だったのが塗りつぶされるようになり、表情も笑えるようなものになっている。家族の絵を描き、母親のエプロンに“happy”と書かれる。又、Ch は犬を飼いたいと要求し、ラッキーと命名する。小動物の治療的意味についてはすでに考察されているが^{2,3)}、ラッキーも Ch にとって大事な役割を果たしていく。母親に“夜食を作ってほしかった、妹には甘い”などとぐちをこぼし始め、Cl も“甘やかせて育てたらいかんというのがあり、自分でやらせる方を多く見すぎた”と反省を始めた。

第Ⅱ期 第5回（9月14日）～第11回（10月23日） 遷延された思春期——母からの自立——

このままの生活を続けていいかどうかという焦りや、無理に学校にひっぱっていかなかったことへの悔い、きょうだい間のトラブルで Cl は疲れ果て、来室時、バスの終点まで乗り越したりする。しかし、一方では親との関係を意識化出来、“清々しさ”も感じている。Cl の母親は1日に何回も電話をしてきて、心配をかきたて、夫（婿）への不満をいう。Cl も母親に同調していたが、これではいけないと話をし、やっと認めてくれたという。“母が主人の悪口をいい、私もそれに同意していた。母と心が密着していたが、切り離され解放感がある”と語られる。“あれこれいわれて自分の一貫したしつけが出来なかった。自分のことでいっぱい、主人や子どものことを考えられなかった”ともいわれる。

結納をかわしながら断わり、その後、何度も夫側から頼まれたため、不承不承結婚したいきさつが話され、出発の時からこだわりがあるといわれる。子どもの幼少時、夫が自分本位で包容力がなかったこと、家族と写真をとったこともないこと、Ch の父親学級にも実家の父が行っていたことが話され、自分の子ども時代と較べて、“自分は小さい頃の思い出が支えになったが、Ch には心の安らぎがなかった”と、Ch への共感を示すことばが出てくる。

Ch は夏休みには友人と映画を見に行くが、その後は家でテレビを見て過す。この時期、妹

との間でトラブルが起きる。妹が“小学校時代、(姉のために)嫌な思いをして、又、こんな……”と言ったのに対し、Chは物を壊したり、妹の足をけつとばす。Clは“あんなにChが怒ったのははじめて”といい、きょうだい関係の調整に苦慮する。

第Ⅲ期 第12回(10月30日)～第19回(12月18日) 夫との関係——出発点でのこだわり——

母親が落ちついてChの相手をするようになると、Chは過去のことをひっぱり出して訴え始め、小学校の時にじめられたことを始めて話す。過去のことを思い出して、夜、眠れなくなるが、犬を起して一緒に居たり、犬に託して自分の気持ちを話したり、犬はChに対して接触欲求を充たすと同時に、自分が世話をする対象としての両面の意味をもってくる。ClはChが犬の世話をするのを見て、“女性らしい、自分はぱっぱっとしている”と感じ、“見習わんといかんね。”とChに話している。

Coは母親にChの気持ちをしっかり聴いていくようにと支え、『親と教師が直す登校拒否』⁴⁾を貸して、気持ちの聴き方を身につけるようにと話し合う。Clは自分の育て方を反省し、“甘えてくると自立させないといけないと思ってしまった。甘えはいけないこと、悪いことというのがあった。くっついてきてもいらいらしてうけいれられなかった”と話される。小学校の時の登校拒否の時も“校舎まで連れて行った、家庭でもいい子だった、息ぬきの場所がなかったと今思う”とChの気持ちを理解し始める。

一方、自分の母親からの分離が自覚されて、Clは結婚の問題、夫婦関係の問題に取り組み出す。気が進まず、不安のまま、“涙にほだされて”結婚したいきさつが再び語られ、“主人との間で物の考え方、生き方が衝突したが、今やとつき合い方が分ってきた”と話される。父親としての夫にも不満が強く、“子どもに物を買いはかりで話しかけもしない、努力して親の姿見せてほしい”と次々と話される。そんな頃夫は突然、“Chを精神病院に入れたらどうか”と話し出し、Clは大きなショックをうけ、夫への不信感をますます強める。Coとの話し合いでその必要性はないことを納得したものの、強い口調で夫への不満、不信感が語られる。それを聴いていくうちに、自分自身の態度にも眼が向き出し、“主人への態度がつっけんどんだった、やさしい面、甘いムードを出す”ように努力を始める。“愛する夫”といったりすると、次女は“気持ち悪い”といい、Chは“それが当たり前”と反応する。自分の生き方を考え直すうちに、車の運転の事に気がつく。ずっと夫の車に乗せてもらっていたのが、両親を乗せるために自分で車を運転し出したら、“主人との接触がなくなった”と思い、なるべく自転車か徒歩にしようとする。今まで見えなかったまわりの景色にも心がいくようになり、がむしゃらな生き方の見直しがされてきているようであった。

第Ⅳ期 第20回(1月8日)～第27回(3月12日)

母娘関係の回復——カウンセラーとしての母親——

Chはひき続き過去のことを思い出して、母親に語りかける。Clが自転車で実家まで行こうと誘うと、“自転車乗ると眼をつぶってしまいたくなる。小学校2年生の時、事故にあった方がいいと思っていた”と話したので、Clは驚き、誘えなくなってしまう。夜中の2時頃まで、小学校時代いじめにあったことを“(学校に居る時)自分の机の前を離れなかった、味方はなかった”と話すChにつき合ううちに、Clの感情も動かされる。自転車で行くことを再び誘い、“前みたいなことあっても、事故があってもお母さんがみていてあげる”と、しっかりとChの気持ちをうけとめられるようになる。くり返し小学校時代の嫌なことが話されると、“又かと思う”Clに、“語りつくされるまで聞いてあげるように”と、しんどさをうけとめながら支えていく。2月になって、Chも元気を取り戻し、編物がやりたいと母親を誘う。Clは“一番

苦手です”といいながら、一緒にセーターを編んでいく。母子で散歩し、公園で遊具にのぼるChを見て、“はじめからおさらいのつもり”とつき合っていく。Chは父親にも“おかえり”と挨拶をするようになる。進路に関しても具体的な話が出来ようになり、Chは高校は退学し、通信教育をうけることを考え出す。家庭教師を頼むこともうけいれられ、準備が進められる。

CIの方もChの話聞くことにより、感情が触発されたのであろうか。テレビ番組でいつも“性的な場面をカット”していたことや、高校の先生がいわれた“人を愛する気持を持つことは大切、大恋愛をなさい”ということばをふと思い出したりする。“人を好きとか嫌、こそべたい、いやらしい、主人を愛するとかそういうことなかった、ふっ切れないまま結婚していた”と話される。この頃、よく仏様を拝むようになり、毎週1回は実家に行き、仏様を心から拝んでいるという。夫婦の関係も少しずつ改善され、“一つのことをしんみりと話し合えるようになってきている。結婚以来ずっとあったいららがなくなって、頭の先から足までずっと下ってきた感じ”と表現される。朝も夫にきちんとことばをかけて送り出すようになっていく。

第V期 第28回(4月11日)～第36回(6月27日) 夫との関係——元の鞘におさまる——

春休み1カ月を挟んでの来室であり、休み中の報告がされる。次女の友人の家族とH公園に行き、Chは妹の友人とその姉に自分のことを話した。この後、この人とは家に行ったり、文通をしたりとの交流が始まる。来春から通信制高校に行くことにし、家庭教師も決る。

4月18日にはChが思いがけず来室し、一時間面接する。ふっくらした体型のごく普通の高校生という感じであった。今までのこと、特に小学校時代のことが中心に話されたが、どういうわけか、手元に記録が残っていない。Chの方から自発的に話したのではあるが、かなり困難な作業だったとみえ、翌日、ぜん息様の発作を起こし、“花粉症”と診断される。Chは来室で、“むし返された”といい、この後は来室していない。

家庭教師も決り、勉強が始まるが、緊張が強く、寝込むことも出てくる。“教科書を見ると思い出す”といったりするが、次第に軌道にのり、英語の暗誦が出来、“ヤッター”と大声を出す。CIも“やれたね”と言葉をかけている。

Chの状態が外に向くのと呼応するように、CIの気持も外に向って開かれていく。今までさけていた同窓会、P.T.A.の集まりに“思い切って話そう”と出かけるようになる。それぞれのグループでChのことを話し、うけいれてもらう経験が出来る。“世間体を気にし、飾ってきた方で、今まで一辺倒の付き合いしか出来なかったが、違うつながりが出来た”と力を込めて報告される。“話すことで世間が怖くなくなった、いらいらが消えた”という。宗教は大切だという気持もはっきりしてきて、夫の代りとして、夫の実家の墓参をする。兄嫁とも今までのことを話し合い、“主人を責めるより、暖かく見守ってほしい”と頼む。兄嫁にも“変ったね”といわれ、他人にいわれふらふらしていたが、“自分の中に一本通るものが出来た”と成長を実感している。夏休みの旅行の計画が話題に出ると、Chはぶいっと席を立ててしまうが、CIは落ちついて対処出来る。“こういう所でいらいらしたけど、今は不思議と自然にうけいられる、嬉しくて仕様がな”と報告される。“不思議なことに色んな応待の仕方が軟らかくなった”ともいい、自分の状態を“心の病気”だったとふり返る。

夫との関係はずっと問題であったが、この時期、一応の納得に達する。“夫婦で話し合いが出来たらどんなに素晴らしいか、道しるべになってほしい”と願いながら、“理想ばかり追っていた”ことに気付き、夫の立場も思いやるようになってくる。“主人は仕事のことで精一杯、

自分の身を支えるだけで精一杯”と、母親役になろうとする。生身の夫を見ずに、理想像を追っていた CI であるが、ありのままの方が子どもも父親をつかめるだろうと考え出す。“そういう主人を選んだ私にも責任がある”と結婚の責任も感じてくる。“元の鞘に納めることが出来た、基盤が出来た、10年計画で家族関係がいい風になるように”と願う CI である。夫にも“お父さんと二人で食べ歩きに行ってみよう”とねだったりする。

第Ⅵ期 第37回(7月11日)～第42回(10月17日) 外に出ること——法事のとりしきり——

この時期、Ch は次第に外に出て行くようになる。夏休みには友人や妹と映画、ショッピングに出かけ、母の実家にも行くようになる。秋祭りには CI の弟の家族が来訪するが、会話にも参加してくる。電話にも気軽に出来るようになった、お手伝いがふえたなど、状態は改善されてきている。法事を10月に行うことになり、Ch をどのように誘うかに CI の気持は精一杯動いていく。この時期に法事があることは、“先祖が何とかしなければいけない”と問いかけていると感じ、Ch を出席させようと心に決める。そのため、親戚の人にあらかじめ Ch の状態を話し、協力を頼んだ方がいいか、親戚の子ども達も呼んだ方がいいかと、さまざまに心を砕いていく。その結果、Ch は落ちついて自然な形で法事に参加し、お墓やお寺にも一緒に行く。CI も“疲れない、自然な形でいられた”と大きな行事を終える。しかし、夫は出席しないで終り、主人役は実家の父が務めている。夫は親戚づき合いの場になると、“がんじがらめになり、部屋から出られない状態になってしまう”ようであり、今まではそれに強い不満をもっていたが、今回は“責める気にならなかった。子どもも父のことをこういう人だと自覚してきているようだ”と夫への気持は軟らく。夫へのいらいらが消えたのが Ch の登校拒否の一番の成果だと話される。

第Ⅶ期 第43回(10月31日)～第51回(3月15日) 赤の取り入れ——感情の開発をめざして——

法事の後、Ch は一人で美容院に行き、パーマをかけてくる。お正月には今まで行くのを拒んでいた父親の実家にも出かけて行く。勉強もこつこつやっている Ch を見て、CI は“休憩は勇気がある、よくなってるのをみるとこれでよかったんじゃないかという気がする”といえるようになる。Ch とも“色んなことあったね”と話せるようになり、Ch は“高校のことは何とも思っていない、休養になってよかった”といい、“やめさせてよかったのか”とずっとひっかかっていた CI の気持もおさまったようである。Ch は母親に“私を恨んだことない?”と聞き、CI が否定すると“そんなはずない、今はカウンセラーの先生にいわれているからいいけど、恨んだに違いない”との会話もあったと聞き、Ch の中に Co の存在があったことを感じる。

進路の問題が目前に迫ってきて、CI は“黙ってみてた方がいいのか、ひっぱった方がいいのか”迷うが、2月半ばになり、夫が Ch に“いつまでもこんなことをしてはいけない、何がやりたいのか、好きなことやらなければいけない”と話し、Ch は“何となくこわい気もする”といいながら、通信制の高校を見に行く気持になる。CI の話からすると、夫は“Ch に対して適切なことは何もしてくれない、頼りない”父親であるが、登校拒否の入口と出口ではきちんと登場してくれたと Co は感じる。このような父親の気持が感じられたのか、Ch もバレンタインのチョコレートをプレゼントする。こうして高校訪問を果し、4月からの進路も決まっていく。CI の気持も落ちつき、親子関係、夫婦関係の整理も一通り出来たようであるが、Co はずっと何か足りないという気持を持ち続けていて、第43回に箱庭を作るようにすすめてみる。出来た作品が図①②である。図①では左隅に白鳥が置かれ、皆が注目している。座っている少女が Ch であろう。皆に向き合って立っているどっしりした大きなお母さん、相對する

小さなお父さん、CI も気づき、“おかしいと思ったが……”と大笑いする。“白鳥をどうしても使いたかった”という CI であるが、Co はインテーク時の母親の真白な姿を重ねて思い出す。木の上の赤い鳥、地面のきれいな鳥が色をそえている。何か足りないものはこのような色で象徴される感情であろう。白鳥は未来を知る神聖な動物であり、アニマが白鳥としてあらわれるとされる、それはまだ意識化されないデモニッシュな存在でもある⁵⁾。CI の心の奥にまだ未熟ではあるが、女性性を示すものがあらわれ、これを通して、CI は夫や子ども達との関係を築いていこうとしている。これまでカウンセリングを通してやってきたのがそのような仕事であるとも考えられる。続いて作った図②では、まずバスタブを真中に置く。赤ん坊をバスタブに入れ、まわりでは家族が見守っている。更にマリヤ像が置かれる。誕生した子どもを家族の中で育てていくこと、又、母性を母親の中で育



図1

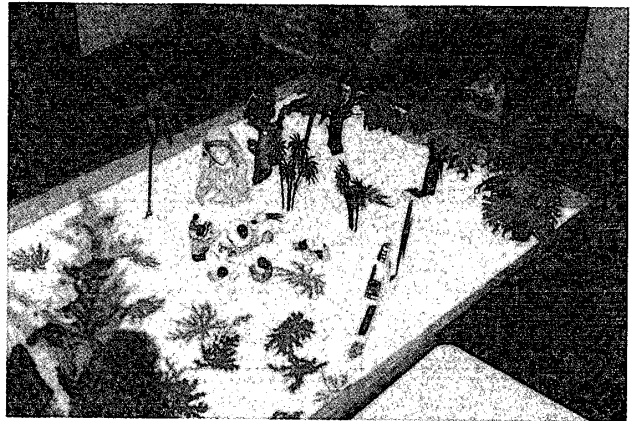


図2

ていくことが今後の課題であることも示されている。それはスキンシップの問題、子どもや夫との間で肌のふれ合いを通した暖かい関係を作っていくことの必要性をも示している。地面に置かれた緑の葉も土との接触の必要性、マリヤ像や白鳥で示される精神性の裏づけになる土的なものの必要性を示していると考えられる。

やはり箱庭のバスタブで触発され、作り終わるとすぐに“自分はべったりするのが好きでない”と話し始め、“おふろも早くに一人で入るようにさせてしまった、自立を急いでしまった”と育児の過程で不足していたものが実感出来たようである。“おふろは人生の出発点”ともいい、その時点で夫の参加がなかったことが“近所のおばさんに入浴の手伝いに来てもらった。父が来てくれたこともあった”と話される。

子どもや夫との間だけではなく、他人との間でも暖かい情緒的つながりをもつのが苦手だったと思われる CI だが、友達に Ch のことを話して分ってもらい、“じーんとした、人の情けを感じた”と友人とのつながりが出来てくる。“青春はこれからと思っている。”“親自身が生き生きしないと……”と考え出し、迷っていた水泳も始める。“息つぎの仕方が分った、ああこれかと納得した”と生き生きと楽しそうに話される。固い枠に閉じこめられていた生命がやっと動き出したような感じである。

母親との関係もう一度おさらいをするようにふり返られ、“母は婿の立場に立たずに、娘

の立場に立っていた”と改めて一つの出来事が思い出される。子どもを連れて知人の家に遊びに行った時、実家に無事に着いたことを電話し、“序でにTさん（夫の名）にもいっておいて”といった所、その奥さんに主人には自分で電話するものだといわれ、自分の母にはこれがなかったと思ったことである。以前から何となく変だと思っていたことが、はっきり意識化されてきたのであろう。

夫との関係にも感情的な色彩が加わるようになる。夫が風邪をひいた時暖かいパジャマを買ってきたら嫌味をいった。“女の気持が分からないのね”といったら着替えてきたと、大笑いして話される。“ことばに出せるまでがなかなか……”といい、ある時には“そういう時、あったかい言葉をかけてもらえば、奥さんにすれば結婚してよかったと思い、胸がじーんとなる”と夫にいう。“ムード派じゃない、恥しくて恋愛出来ない、自分の心を現わすのが不得手だった”といい、ことばのかけ合いが大切だと実感し、“演技が必要”ともいう。又、夫を責めるばかりでなく、“今までわがままだったかもしれない”と、自分の思う通りに夫や子どもを動かそうとしていたことに気付いてくる。

Coにも“先生も大変ですね。今まで黙って聞いていて下さって”といったわりの言葉がかけられる。

第52回（5月9日） フォロー・アップ

2カ月後に報告のために来室する。Chは入学式の日友達が出来たこと、入学時の作文では「学校生活」のテーマを選び、小学校の時のことや登校拒否の2年間の事を書いたこと、面接でも自分のことをきちんと話したことが報告され、今までの整理をし、新しい道を歩き出したことが確認出来た。

夫との関係では、夫が薄いブルーのジャケットを着ていたので、“ヤングらしくて素敵じゃない！”といったら、てれくさそうにしていたと笑って話される。“女3人で主人は疎外されがち、主人は憩いの場として家庭を求めているし、甘えている所もある。おいしい物を食べさせてきちんと毎日の見送りをやっていく。”といわれ、安心出来る状態であることが分った。

考 察

母親の面接は、子どもへの対応をどのようにするかという面と、母親自身の問題を掘り下げていく面と両方が必要である⁶⁾。事例によってはどちらかに重点がおかれるが、ここで提示した事例では両面が必要だったと考えられる。1. 子どもへの対応と2. 親自身の問題の解決の両面から経過を考察し、あわせて登校拒否児の母親面接の在り方についても言及したい。

1. 子どもへの対応

①現実的問題の処理

“学校へ行かない”という子どもの行動は、親や家族、更に学校の教師をも混乱に陥し入れる。親は無理にでも行かせた方がいいのか、休ませた方がいいのか、たちまちにして選択を迫られるし、思春期の子どもでは学校に行かなくなると同時に、“朝、起きない、部屋に閉じこもる、物を投げたり、ののしりの言葉を吐く”など、それまでの規則正しい生活は崩れ、親への態度も変わってしまうことが多い。子どもに対して、どのように接していけばいいのか、親としてはとまどうばかりである。親のカウンセリングはこのような訴えを聴き、事態を鎮める所から始まっていく。本事例でも部屋にこもったり、物を投げたり、ピアノの陰に蹲まっていたりと、それまでの“いい子”から一変した行動を示している。親は大きな打撃をうけ、それまでの子どもへの態度をかえざるを得なくなってくる。強い態度で命令調にいていたのを、

子どもの意志を尊重するように努力を始める。もっとも、容易なことで変化させられるものではないので、身につくまでには1年程の期間は必要である。カウンセラーとしては、その間の親の葛藤を理解し、苦しみに共感して支えていくことになる。

“学校に行かない”というのは、今の社会にあっては、大人に対しての強烈なパンチである。子どもの自発性にまかせるとはいっても、親は最後まで登校の望みを棄てられるものではないし、カウンセラーでさえ、どこかで“行ってくれたら”という期待をもっているのは否定出来ない。本事例では父親が休学願を出すことを決定し、母親がそれに従うが、母親にとってこの決定は最後まで不本意であり、“あれでよかったか”という迷いはずっと続いていく。子どもも休学をうけいれ、ほっとすると同時に、その内面では学校へのこだわりがずっと続いている。学校のことに触れられると、おちこんで眠れなくなったり、怒って家をとび出したりしている。ようやく進路の問題が考えられるようになるまでには10カ月程の期間が必要であった。高校は退学し、通信制の高校に行くことを決定するのである。カウンセラーも“自分で選ぶ”ことの重みを実感し、その決定を喜べるようになるまでには、親や子どもと葛藤の時間を共有しなければならない。まわりの大人は子どもに“何を大切と考えるか”と問われ、それぞれの立場での解答を出すように迫られているのである。又、本事例では、父親は家族にすすめられて今の職業についているし、母親は養子になることや結婚など、親のきめたままに従っている。子どもが親の生き方を覆し、親に欠けていたことをやりとげたともいえるであろう。

登校をめぐる学校との協力関係も大切である。本事例の母親は、積極的かつ現実的能力は高い人だったので、カウンセラーは生活指導の先生から一度電話をうけただけですんでいる。母親が他人との接触が困難であったり力が弱い場合には、カウンセラーが学校との調整を買って出なければならない。その場合、学校と親の関係の在り方自体が、その親の対人関係の在り方や、その家庭の対社会的態度を現わしていると捉え、現実的な問題にまきこまれないことが大切である。

②カウンセラーとしての母親

思春期の子どもはなかなか我々の前に姿を現わしてくれない。むしろ来談を拒否することが、与えられたものを拒否し、新たに自分の選択をし、自分で関係をつけていくことにつながっていくと考えられる。親や教師の働きかけを拒否し、自分の中に閉もっているようにみえるかれらも、誰が自分の気持を本当に分ってくれるのか、味方になってくれるのは誰かとアンテナを張りめぐらしていることを知っておかねばならない。相談に行き始めた母親がどのように態度をかえてくるのか、かれらは敏感に見張っている。そうであるからこそ、母親の来談だけでその背後の子どもとも関係を結ぶことが出来るのである。本事例でも母親が無理に墓参に行かせなかったことに対して“お母さん変わったね、絶対行かされると思った”といている。又、“カウンセラーの先生にいわれたから……”の発言のように、明らかにカウンセラーの存在を意識している。カウンセラーの方も、眼の前に現われなくても、母親の背後にいる当の子どもを意識し、常に尊重していることが必要である。

次に、カウンセラーの役割として必要なのは、母子のやり取りのスーパービジョンである。母親の気持が子どもの方に向き、“学校に行けない”つらさを共感出来るようになると、子どもは母親に甘えたり、ぐちを言い始めたり、あるいは過去の不満や恨みを訴え出す。母親がそれをどのようにうけとめ、耳を傾けていくことが出来るか、母親にとっては傷を逆なせされることにもなりつらいことである。母親のつらさを感じ、母親が子どもをうけとめていくことができるよう支えていかねばならない。本事例でも一時期、夜中の2～3時まで母親に過去のつ

らなかったことを訴えている。このような子どもの相手が出来るのは、自分がカウンセラーにうけとめてもらい、聴いてもらった体験を通してであろう。カウンセラーの訓練として、自分自身がカウンセリングやスーパービジョンをうけることが必要とされるが、自分が他人にきちんとうけとめられ、依存する体験をしてこそ、他人にも同じことが出来るといえる。カウンセラーは母子の関係を見守っていくスーパーバイザーの役目をするといえよう。そして、カウンセラーがクライアントによって育てられていくように、母親も子どもとの関わりを通して成長していくことが出来るのである。

2. 親の問題の解決に向けて

①遷延された思春期

思春期の人達の治療の困難さについて、中井久夫は“思春期患者は、どうやら治療者の中に眠っている幻想、つまり治療者の中で dormant state にある思春期をあばき出す力を持っているようだ。”⁷⁾といている。かれらは、家庭内に於ては、親の思春期を問い直す力を持っているようである。親自身がどのような思春期を過し、親からの自立をし、結婚に至ったかの過程をもう一度ふり返らざるを得なくさせることが多い。

本事例でも母親はそれまで半ば無意識であったが、どこかで変だと感じていた自分の母親との関係を問題にし始める。小学校の頃から母方祖母の養子になるようきめられていたが、いやだ、にげたいと思いつながらいえないできたこと、結婚してから親に逆らい出したと話される。結婚もいわば親のきめたままになり、しかも婿が気に入らなくて不満をいう母親に同調してしまっている。“母と心が密着していた”と表現される。結婚後、物理的に家から離れても、心は実家に残したままの状態だったといえよう。一家の主としての役目や子どもの父親としての役目も実家の父が果してきている。養子の夫は家族の中に入りきれず、そういう夫に対して不満を募らせるばかりでいらいのし通しだったという。子どもの問題を契機にして、意識化が出来、母親から切り離された解放感を味わう。夫に対しても“結局は自分が選んだ人”と結婚の責任を感じ取り、幻想を断ち切って、現実的に夫を認め、夫を主人にしようと努力を始めていく。親からの自立、結婚相手の選択、新しい家庭を作っていく責任を荷うこと、ここに遷延された思春期に終止符がうたれたといえよう。

思春期の子どもの親は人生の一つの節目を越える時期にさしかかっている。子どもを離し、自分の年老いた親と和解し世話をする時期を迎えねばならない。この時に、今までし残してきた問題の整理しておくことが必要である。子どもの登校拒否は家庭を作り直すきっかけともなり得るのである。

②感情の開発

この母親はかなり早い時期から、知的には問題の本質を理解し、自分がどのようにすればいいのかも分っていた。話の仕方は論理的であり、何ら反論する余地のない意見が述べられた。カウンセラーとしては“ごもっとも”と思いつながら、毎日の生活で家族がどれだけ圧迫され、支配されているかを考えさせられた。いわば未熟なアニムス（女性の心の中の男性像）⁸⁾のとりことなっていたといえよう。かの女にとって必要だったのは、人の気持を思いやったり、自分の気持を素直に表現することだった。そのためにはまずかの女の感情が生き生きと動き出さなければならぬ。子どもが自分の気持を母親にぶつけていったことも気持をゆり動かすのに役立ったが、箱庭も又、その役割を果たしてくれた。作品を眺めて自分に足りないものを感じ取ったようである。他人との間に真の関係を打ち立てるアニマ（男性の心の中の女性像）⁸⁾の機能を次第に身につけ始めていった。P.T.A.の集まりや同窓会で同年令の女性との間で“ジーン

とする” 気持の交流を経験する。家庭内に於ても、子どもや夫の気持を理解することばが出てくるようになる。特に、夫に対してまだ“演技”をしなければならない段階ではあるが、“気持を分ってほしい”と呼びかける。感情のことばで語り始める時、夫の方も動かされてくる。すなわち、娘との間で交流が出来始め、それまで逃げていた妻の実家の父親にも挨拶をするようになる。知的に理解されていた事柄に感情の裏づけが加わると、相対するカウンセラーもそれまでの落ち着いた気分がなくなったり、母親の語ることばに没入していけるようになっていった。

また、本来クライアントは活動的で、“負けず嫌いで人の出来ることなら何でも出来ないかんと頑張ってがんばる”性格だったが、それを子どもや夫にも押しつけてきた。子どもは母親の活動性に押しつぶされたともいえよう。クライアントは自分の活動性を、プールに行ったり、地方誌に投稿したり、集まりに出て行ったり、自分でひきうけ始める。“親が生き生きしない”子どもは親に押しつぶされてしまうであろう。ここである程度、アニムスの引き戻し⁹⁾が行われたと考えられる。

おわりに——まとめ——

思春期における登校拒否児は来談しないことが多いため、母親面接を通して子どもの成長を促進する方法が考えられねばならない。本論では高校2年生女子の母親面接の経過を示した。面接は2年近く計51回続けられ、子どもは高校を中退して通信制の高校に入学する道を選んだ。子どもへの対応と親自身の問題解決の二面から面接の経過を分析し、子どもが自分で進路を選択するまでの親の苦悩を共感しつつ親を支えていくこと、母子関係の在り方を見守っていき、適切な助言を与えるスーパーバイザーの役目を果たすことがカウンセラーの役割であるとされた。

又、親自身が自分の遷延された思春期の問題を解決し、生き生きと生活していくことが出来るよう援助していくことの必要性が述べられた。子どもの登校拒否は、それまでの親の生き方や家庭の在り方を変えるきっかけともなり得るのである。

親自身の思春期の問題と子どもの問題の重なりについては、今後他の事例でも検討していきたいと思う。

最後に、それぞれの苦しみを経て、新しい歩みを始めたクライアント一家が、この2年間でばねにして更に成長されることを願うものである。

引用及び参考文献

- 1) 山中康裕：思春期の精神病理と治療，17～62，岩崎学術出版社（1978）
- 2) 河合隼雄：子どもの宇宙，71～99，岩波書店（1987）
- 3) 田畑 治：心理療法における小動物のテーマの治療的意義——子の親離れ・親の子離れに媒介となるケースをめぐって——，名古屋大学教育学部紀要，33，303～313（1986）
- 4) 東山紘久：母親と教師がなおす登校拒否，創元社（1984）
- 5) Von Franz, M. L. 秋山さとる，野村美紀子訳：メルヘンと女性心理，134～136，海鳴社（1979）
- 6) 田畑洋子：併行母親面接の治療過程に関する一研究，児童精神医学とその近接領域，21，236～247（1980）
- 7) 中井久雄：思春期の精神病理と治療，1～16，岩崎学術出版社（1978）
- 8) 河合隼雄：ユング心理学入門，193～218，培風館（1967）
- 9) Jung, E. 笠原嘉，吉本千鶴子訳：内なる異性—アニムスとアニマー，海鳴社（1976）